

明治大学人文科学研究所紀要 第54冊 (2004年3月31日) 335—352

古流柔術「殺法」に関する文献研究

手 塚 政 孝

— Abstract —

A literary Survey of *Jujutsu Sappo*—Striking Techniques

TEZUKA Masataka

There are some defending techniques in old-style Jujutsu, i.e., throwing techniques, Strangling techniques, joint techniques, and striking techniques. I have been conducting several literary surveys on *Jujutsu Kappo*—Traditional resuscitation methods.

Through these studies, I have realized the necessity of doing research on *Sappo*, one of the striking techniques in Jujutsu, as *Kappo* has developed together with *Sappo*.

For a deeper and better understanding of *Kappo* technique, this paper focuses on literary surveys of *Sappo*—striking techniques in the major schools of *Jujutsu*, *Yoshin-ryu*, *Shinno-shinto-ryu*, and *Ten-jin-shinyo-ryu*.

《個人研究》

古流柔術「殺法」に関する文献研究

手塚 政 孝

1. はじめに

古武道には、剣術をはじめとして槍術、薙刀、棒術、杖術、弓術、躰術・柔術、拳法などがあり、多岐にわたっているが、古武道発生当時は、これらの各武術を含めた総合武術として、主に戦場武術として存在した。香取神道流、卜伝流、鹿島神道流、柳生新陰流、馬庭念流、竹内流柔術、関口流柔術など、創流当時はいずれも総合武術の色彩が濃いものであった。

なかで、柔術は、歴史的には日本に伝わる古流武術の一種目であり、徒手をたてまえとして、ときに武器をも使用する格闘武術である。名称も、小具足、腰の廻り、捕手、和、柔、拳法、白打、躰術などと呼ばれたが、柔術という名称は江戸時代初期から普遍化し、明治時代に講道館柔道に発展し現代に至っている。古流柔術は、その流祖が実戦場裡における体験をもととして、主観的あるいは個性的工夫の末に創られたものであり、しかも秘技として扱われたもので多くの流派に分れた。同じ流祖の末流でも分派から分派を生み、しだいに多くの流派に分れてきた歴史的経緯がある。

古流柔術における制敵技法を概観すると、拳法・体術の技術の核となる当身技、小手返しなどの逆手を中心とした関節技、頸部への絞め技及び抑え技、巧みな体捌きによる投げ技などで構成されている。

「殺法」に関しては、各資料の中で、技の連続の中で相手を制することから、当身技に加えて関節技、投げ技を含めて「殺法」と呼ぶ場合があるが、多くは急所への当てによって相手を制する当身技のみを「殺法」と呼ぶ場合が多い。特に楊心流柔術系統の流派では、姿勢、目付、各種制敵技法に加えて、「殺・活法」及び急所に関する記述が多いように見受けられる。

ここで取り上げる「殺法」とは、人体の生理的弱点である急所（経穴、ツボ）に対し、当て（打突）によってショックをあたえ、相手をしびれ、くらみ、気絶等の状態におとし入れて、一時的に抵抗不能にしたり、時に死にいたらしめる当身技を指す。

著者は、これまで柔道の絞め技（固め技の一つ）によってもたらされる「落ち」（意識消失）の生理機構に関して、実験生理学的立場から検討を重ね、「落ち」（意識消失）が窒息とは異なる一過性の機能障害であること、絞め技が固め技としての束縛技であること等を実証してきた。また、「落ち」の状態を回復させる方法として旧来から蘇生法「活法」が伝えられており、「活法」の生理効果に関しても若干の検討を加えてきた。そのような研究経過の中で、古流柔術における「活法」の詳細を調

らべる必要性を感じて調査を実施してきたが、多くの古流柔術流派で蘇生法「活法」は制敵技法である「殺法」と共に取り扱われていることが多く、いわゆる「殺・活法」として表裏一体となって発展してきた経緯があった。

「活法」は攻撃を受けて機能の脱落した者への処置法であるのに対し、「殺法」は攻撃側の制敵技法であり、当身技術の内容、修練法、攻める急所の部位、各流派の特性等種々の内容を包含している。

今回は、「殺法」に関する継続調査の中で、特に当身技の工夫、研究が盛んであったといわれている楊心流系の柔術——楊心流、眞之神道流、天神眞楊流柔術を取り上げ、伝書及び伝書研究報告等によって、古流柔術「殺法」——当身技について、技術体系の概要、攻める急所の名称、急所の部位の確定、現在の柔道の「形」との比較、当身で攻めた際の生理効果等の視点から本報告を纏めることとした。

2. 楊心流柔術の殺法について

楊心流について、天保十四年（1843）に著わされた「武術流祖録」、及び楊心流関係の伝書などから、流祖は秋山四郎義昌、二代目大江仙兵衛義時と目される。年暦は詳らかではないが、秋山四郎義昌は肥前長崎の小児医師であり、中国武官から柔術技法及び活法も併せて伝授されたと伝えられており、その後太宰府天神に参籠し、遂に其の妙秘を悟り捕手三百手を工夫し、楊心流を起こしたと伝えられている。楊心流では、楊柳の枝が細くしなやかで、微風にも直ちに順応して靡き、自からの体を失わず持しているように、敵の変化に順応していつでも変動できる心とからだの在り方を本旨としており、技も敵の動きに順応しながら、敵の虚を突いてこれを制すること、また力の争いを避けて、心の動きを導び、心をもって敵を制することを流旨としている。

楊心流の技術体系を知る資料としては、天和三年（1683）二代目大江千兵衛が記した「楊心流静間之巻」があり、そこには技術（形）として、眞位、暫心目付、抜見目付、無刀別、立合請別、車捕、楊之位の名称が見られるが、詳細は不明である。「楊心流覚悟之巻」には、当身の部位を示す烏兎暗、雁下、松風、月影、水月、明星、村雨、籍留、の名称が示されており、楊心流の当時の技術の原形的なものは窺い知ることができる。楊心流四世河野巢安が天文三年（1738）三月、門人赤崎平七に授けた伝書には、技術体系及び内容がより詳しく記されており、その内容は、居捕（七種）、立合（七種）、壁添（七種）、行合（七種）、上段手数廿ヶ条（十五項目）、極意堅五ヶ条（五項目）、殺活（七種）、楊心流心持覚悟ノ巻（十五項目）で構成されている。殺活としては、松風、急雨、稲妻、雁下、水月、明星、月影の名称が示されている。

次に、楊心流と目されている古流楊心神道流の目録を見ていくと、その内容は、中段・居捕十四ヶ条・上段・立合十四ヶ条の計二十八ヶ条、阿手身（当身）極意十六ヶ条、雲上之伝（吐息、秘薬）、心法から成っており、殺活関連を見ると

阿手身（当身）極意

一、草靡　一、秘中　一、人中

古流柔術「殺法」に関する文献研究

一、烏乱 一、独鉗 一、烏兎
 一、明間 一、松風 一、村雨
 一、釣鐘 一、電光 一、月影
 一、雁下 一、少寸
 一、水月 一、貫元

雲上之伝

一、吐息之事 一、秘薬之事 口伝

心法、署名花押の後に、「殺活楊心流正伝系譜如斯」と記されている。

また、同流には「古流楊心神道流経絡巻」が残されており、これには、人体の主要臓器の位置と機能、各臓器の連絡等、いわゆる人体の解剖・生理に基づく急所及びそれに対する殺法（当身技）の効果が解説されている。殺活法に関する極めてめずらしい伝巻といえる。項目のみを記せば、松風ノ殺、村雨ノ殺、電ノ殺、月影ノ殺、雁下、明星殺、水月、烏兎ノ当となっている。

これらの資料によって、楊心流の技術体系及び内容を概観すると、その技術を、敵と生死を争う場面の形態によって分類・体系化し、(1)、居捕（坐った姿勢で相対した場合）、(2)、立合（立った姿勢で相対した場合）、(3)、壁添（壁に添う場合）、(4)、行合（立った姿勢で双方から接近した場合）と配列し、これに、(5)、殺法（当身）、(6)、活法（蘇生法）を加え、更に薬餌療法と関連した製薬法によって構成されていることがわかる。

楊心流の技術面については、その根本を楊柳の精神にしていること、殺活のいわゆる当身を重視していること、またこれに伴う活法（蘇生法）を秘伝として伝え、更に怪我に対する薬餌療法をもその教授内容としていたことなどが楊心流の特徴と見ることができる。また、楊心流においては、相手を制する技として、殺法（当身技）とともに絞め技の研究も盛んであったと伝えられている。「楊心流死活之極秘」（文化七年（1811））には、殺法としての当身技の解説とともに絞め技によって相手を制した際の、相手の状態を様々な視点から細かく観察して対処するための極意が著されており、項目のみを記すと、殺サカイノ変、ハナシ様ノ変、手ニテアテ様ノ変、足ニテケ様ノ変、稲妻目当ノ変、水月目当ノ変、ウノケンノ変、半死ノ変、猫殺ノ変から成っている。絞め技が効いた際の様相、相手の呼吸の仕方、相手から伝わる脱力感、手足の痙攣、目の返り等によって相手が意識を消失し、機能脱落にいたる判定基準が示されている点が興味深い。

楊心流は、すでに天和・貞享（1600年代後半）の項にその隆盛をみており、柔術としては古い流派に属する。発祥の地が長崎ということもあって、東洋医学（経絡経穴と急所の関連など）の影響を多く受けていることが窺える。楊心流では、当身技と絞め技を併用した優れた制敵技法（殺法）が種々考案されたと伝えられており、絞め技においても着衣を利用した多彩な技が示されている。しかし、技の中核を成すのは、急所（経穴）への打撃を中心とした殺法（当身技）であったと考えられ、急所に対する研究が生理効果を含めて盛んであったこと窺い知ることができた。

3. 眞之神道流の殺法について

眞之神道流については、「武術流祖録」に、

眞之神道流 山本民左衛門英早

摂州浪華ノ人也、楊心流ヲ学ブト云フ、其ノ絶妙ヲ悟リ潜カニ眞之神道流ト号ス、門二本間丈右衛門傑出タリ、後江戸ニ來リ大イニ鳴ル、門人多シ、

と記されており、他伝書からも、その流祖は山本民左衛門英早であることは確かである。

眞之神道流を学んで新たに天神眞楊流を起こした磯又右衛門の五代目正信と吉田千春が著した「天神眞楊流柔術極意教授圖解」には、

眞之神道流ハ大阪御城同心山本民左衛門ト云人元祖ナリ、最モ元來楊心流ヨリ工夫シテ分別シタル流儀ナル故ニ手形・手数ノ多称ナドモ同様ナル事多ク在テ、三百三手ノ内ヨリ扱ビ抜テ、初段、中段、上段ト級格ヲ定メ、其手数六十八手トス、是則チ眞之神道流ノ起源ナリ、——略——

眞之神道流の流旨については、同流「初段之巻」に

当流ハ怪我ナク我ガ敵ヲ制スルノ妙アリ、敵マタ恐レル敵ナレバ口ヲモッテ是ヲ助ケ免スル事を第一トス、因テ眞之神道流ト号ス

と記されている。眞之神道流が楊心流の楊柳の精神を受け継ぎ、殺活自在の技術を身につけ、神の心を心とした智仁勇兼備の体術家を目標としたことが窺える。

眞之神道流の技術体系は、伝書（高橋家所蔵）に次の様に示されている。

初段（手解七手合、居捕十四手合、立合十四手合）

中段（居捕十四手合、立合十四手合）

立合（五手合） 居捕（五手合）

極意上段（立合十手合、居捕十手合）

五箇之傳

七箇之傳

九箇之傳

襟活法

掃活

これらは、技の教授段階を示すものでもあり、まず「初段之巻」、次いで「中段之巻」、「上段之巻（上檀之巻）」の順に教授された。

最初の「初段之巻」では、まず手解（逆手以下七本）、次いで居捕（眞之位以下十四本）、立合（誘引以下十四本）、分銅三尺鎖（岩石碎以下十本）、五箇之傳（雲捕以下五本）、七箇之傳（別解以下七本）、活法と進み、続く「中段之巻」では居捕（眞之位以下十四本）、立合（行違以下十四本）、知木力（車玉以下十本）、七箇之傳（衿ノ大事以下七）、九箇之傳（草靡以下九、活法）、秘歌となっており、これが終って「上段之巻」へと進むことになる。「上段之巻（上檀之巻）」では、立合之亘（事）、

古流柔術「殺法」に関する文献研究

七箇之傳，居捕之叟，心持覚悟之卷（繩之叟），雲上之卷（殺活法），七箇之傳，九箇之極意（殺法）などとなっており，殺活法関連を見ると，雲上之卷には釣鐘，電光，月影，鴈下，少寸，明星，水月の急所名が示されており，九箇之極意（殺法）には，百会，天見，鴈兎，眼下，独鉗，明星，明閑，秘中，松風，急雨，活法として陰囊活，総活と記されている。他に，序破急，万法帰一などの題による技術・心法解説が見られる。

眞之神道流でも，技術としては，楊心流の楊柳の心をその精神とするとともに，殺法（当身），活法が極秘の伝として尊ばれていたことが特徴的といえよう。

4. 天神眞楊流の殺法について

天神眞楊流の流祖は磯又右衛門正足（号柳閑斎）である。伊勢国松坂で紀州藩土岡山家に生まれ，幼年の頃より武術を好み，十五歳で京都に出て楊心流を一ッ柳織部の下で修業，さらに眞之神道流を木間丈右衛門に師事し，両流の奥義を極めたといわれる。その後諸国を遍歴，武者修業を重ね，当身技（殺法）の有効性を体験し，積年心力をそそぎ，「眞ノ当」（生理的弱点・急所を突く，蹴る，圧する等の技法）を完成，京都北野天満宮に参籠して悟りをひらき，天神と修業を重ねた二流より眞・楊を合せ天神眞楊流と名づけてこれを創始した。

天神眞楊流の技術体系は，「手解」十二本，「初段居捕」十本，「初段立合」十本，「中段居捕」十四本，「中段立合」十四本，「投捨」二十本，「試合裏」二十四本，「極意上段立合」十本，「極意上段居捕」十本，「乱捕」，「口傳」五本，「当身」，「活法」で構成されている。特に殺活法関連では，「当身」として，天倒，烏兎，霞，人中，独鉗，秘中，松風，村雨，胆中，水月，雁下，月影，明星，電光，釣鐘，草靡，尺澤が示され，「活法」としては，陰囊活法，死相，誘活法，襟活法，総活法（肺入活法，気海活法，裏活法）が示されている。

「天神眞楊流天之巻」では，天神眞楊流の流旨が，和・武一体にあることを掲げ，技においては，眞之神道流上段，立合之事（十本），居捕之事（十本），雲上之巻（釣鐘，電光，月影，鴈下，少寸，明星，水月），さらに序破急，万法帰一といった心法の教授内容が示されており，眞之神道流を踏襲したものであることが窺える。

また，「柔術経絡人之巻」では，天神眞楊流柔術において用いる当身（殺法）の身体における部位を示し，その部位の内部に蔵している内臓の位置，名称，他の臓器と関連したその機能等について解説が加えられている。当身の理論を体得させようとしたものであり，ここに取り上げられている当身（殺法）は，松風ノ殺，村雨ノ殺，電ノ殺，月影ノ殺，鴈下ノ殺，明星ノ殺，烏兎ノ殺の七つである。当身（殺法）によって，相手を倒すあるいは動けなくするといった技法はここでははぶかれ，内臓諸器官に影響を及ぼす，極れば重篤な症状を呈して，生死にかかわる急所への当のみが取り上げられている。

幕末，隆盛をきわめた天神眞楊流は，現在でも継承され，師範家が存続しており，国内各地に分れているとはいえ，その中心は中野区在住の免許皆伝久保田敏弘氏（紀州藩士の家系）であろう。伝え

られる技術内容をつぶさに見聞することができ、口傳・秘傳とされ、わずかに伝書等で名称のみを知る術しかない古流柔術について、継承者のいる天神眞楊流からさかのぼって楊心流、眞之神道流の技術内容を知ることができるのは貴重である。

天神眞楊流において、当身技に用いる身体の部位は次の通りである。

一、手

- 手刀（五指を伸ばし指間を密着させ、小指付根より手首に至る部分）、霞、烏兎、村雨、松風、尺澤を当てる
- 矢筈（四指間を密着させ、親指との間を開く、先のない矢の如く）、肢中を突く
- 拳（握り拳、握り拳甲、握り拳面）、天倒、烏兎、人中、霞、水月、電光を当てる
- 手先（四指、親指）、霞、独鈷を当てる
- 手首、肢中を当てる

二、肘、臑中、水月、稲妻を当てる

三、頭

- 前額部、臑中を当てる
- 後頭部、顔面を当てる

四、足、（五指裏の付け根あたり）、水月、明星、稲妻、月影、陰囊、電光、草靡を当てる

五、踵、草靡を当てる

急所については、

一、天倒、頭の頂で、小児が脈を打つ所

二、烏兎、両眼の間、鼻の上部

三、霞、両眼尻と両眉尻の間、米嚙

四、人中、鼻と上くちびるの間

五、肢中、喉頭と胸骨の気管

六、村雨・松風、秘中の左右、右村雨、左松風（左右の頸動脈）

七、臑中、水月の上部、両乳首の延長線上胸骨の中央部

八、水月、胸部と腹部の間、中央剣状突起の真下

九、稲妻、右肋腹

十、月影、左肋腹

十一、明星、臍の下三センチ四方

十二、陰囊（釣鐘）、辜丸

十三、尺澤、手首より四センチ位上、（俗にいう脈所）

十四、独鈷、両耳の下、深く凹んだ所

十五、電光、背柱九節の三センチ四方

十六、草靡、向こう脛の裏

となっており、夫々の急所への攻撃法及び生理効果が示されている。

古流柔術「殺法」に関する文献研究

天神眞楊流においては、流旨は楊心流、眞之神道流の楊柳の精神をそのまま継承している。そして、その技術においては、居捕、立合など前記流派とほぼ同様の内容で編成されているが、特に乱取における寝技に優れていたこと、当身、活法、怪我に対する処置法、製薬法を伝えていることなどが特色とみられる。

「死活自在接骨療法柔術生理書」について。

明治29（1896）年、井ノ口松之助が柔術に伝わる殺活法を中心に「死活自在接骨療法柔術生理書」を著している（醍醐敏郎氏所蔵）。ここでは、古流柔術技法とともに、生体に及ぼす殺活法の影響（生理効果）について解説を行っており、主に天神眞楊流の急所、それに対する当身（殺法）の詳細と、当時の解剖学的・生理学的知識による解説の内容を知る史料として興味深く、強く保存の必要性を感じ、転載させてもらうこととした。

當身ノ解（天道及ヒ天倒ノ當）

此ノ天道及ヒ天倒トハ前頭骨部ヲ云又天倒ハ頭ノ頂ニシテ（小兒ノ時頭腦ニ脈ヲ打ツ所ヲ天倒ト云フドリコリ共云處ナリ）頭蓋是レナリ此ノ頭蓋ヲ衝突スルトキハ前頭骨ノ腦髓ノ活動ヲ變ジ故ニ人体ノ最モ大切ノ急所ナリ故ニ凡ベテ首ヨリ上ノ殺ハ活法ヲ施スヲ要セズ之ヲ當打タハ必ズ腦病トナリテ智覺ヲ失ヒ精神一變スルニ至レルナリ、頭部ニハ三個ノ窩ミアリテ、前窩ミハ大腦ノ前葉ヲ納メ中窩ミハ大腦ノ中ノ中葉ヲ盛り後窩ミハ小腦ヲ納ムル故ニ頭蓋ヲ衝突スレハ左圖ノ如キ原因ニ依リ卒死スルナリ是ヲ生理說ニ因テ解説セハ左ノ通り

腦髓震蕩 知覺的刺劇ト云フ又腦ハ六個ノ骨ヲ以テ圍ミ六個トハ、額骨、顱頂骨、蝴蝶骨、枕骨、
ソウモン 聰門、セツジ 顱顙骨 即チ是ナリ

又曰ク頭部ノ當身ニ於テ通常ハ各柔術ノ流派トモ同一ノ義ナレドモ流名ノ異ナルニヨリ總テ其名稱ヲモ異ニスルアリト雖トモ古來ヨリ各名家ニ於テ皆其法ヲ秘シ前陳ノ如ク免許以上ニ及ンデ始メテ奥義ヲ示ス者ナレハ尤モ大切ノ秘法ナレバ大概子「以上」説ク處ノ如シ——畧——

烏兎ノ殺

是ハ顔ノ中心兩眼ノ間鼻ノ上部眉ノ下部ノ間ヲ云フ

此ノ當ハ握拳カ又ハ手刀にテ當ル處ナリ尤モ大切ノ場所ナリ是ハ活法ニテモ急ニ戻リ難シ中ノ八迄ハ死ス故ニ稽古中モ能ク注意ヲナスヲ旨トス此處ヘ當ル時ハ如何ナル強敵ナリト雖モ卒倒スベシ（圖参照）是ノ處ハ眉毛隆起ノ骨ニシテ下ハ眼窩ノ上ニ及ビシ其兩側ノ眼窩起線アリ其上部ニテ額洞開閉ス此ノ額洞ノ内面ハ多ク窩ミヲ有シ大腦ノ迂廻ニ對ス中央ニ縱横ノ起線等アリテ厚ク腦膜ヲ附帶スル故ニ之ヲ打撃セバ左ノ原因ニ依テ卒倒ス（生理說ニテハ）

大腦刺激 シンケイサクジョウ 神經錯擾

兩眉間打撃に原因ス（兩眉間トハ生理ノ額洞地ヲ謂フモノナレバ骨間トノミ局定スヘカラス）又兩眼衝突ノ法ニ就テ解説スレバ兩眼間ハ内骨突起ノ中間ニ修出スル鼻骨懸點ノ處ナリ此ノ邊ハ視神經突刃ノ處ニシテ之ヲ打撃セバ直ニ視覺ヲ擾乱セシムルノミナラズ眼窩ニ反射烈響シテ鼻神經及ヒ額神經淚

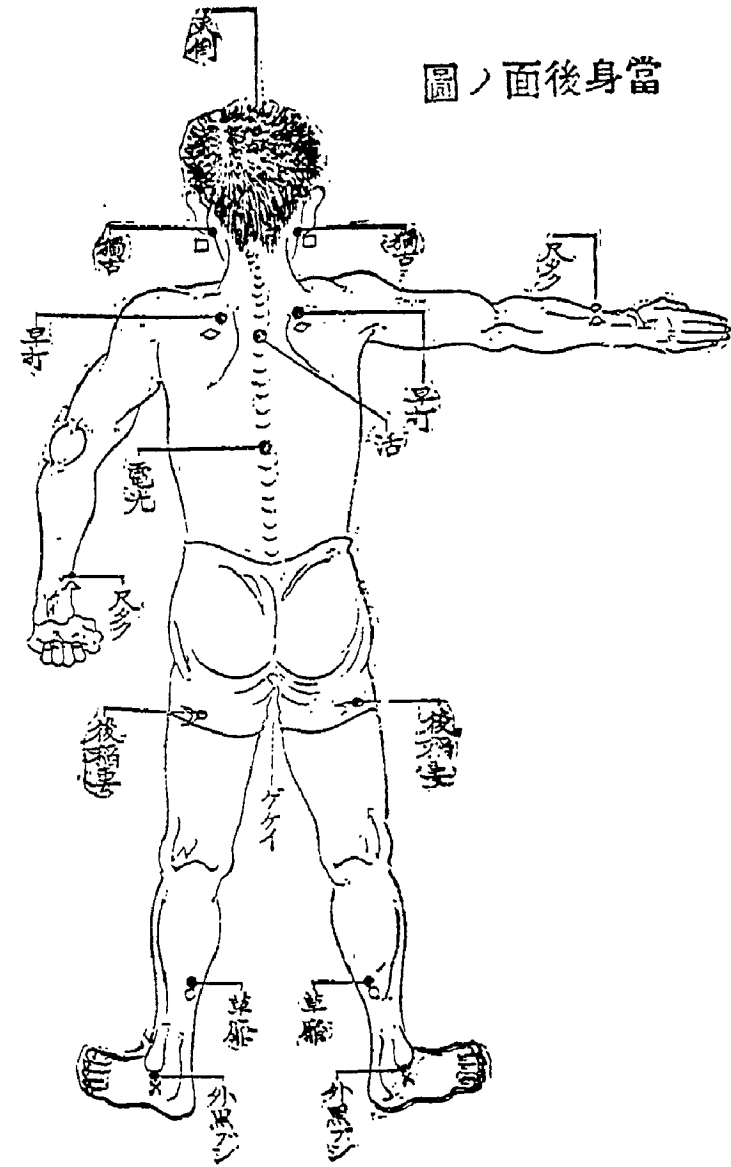
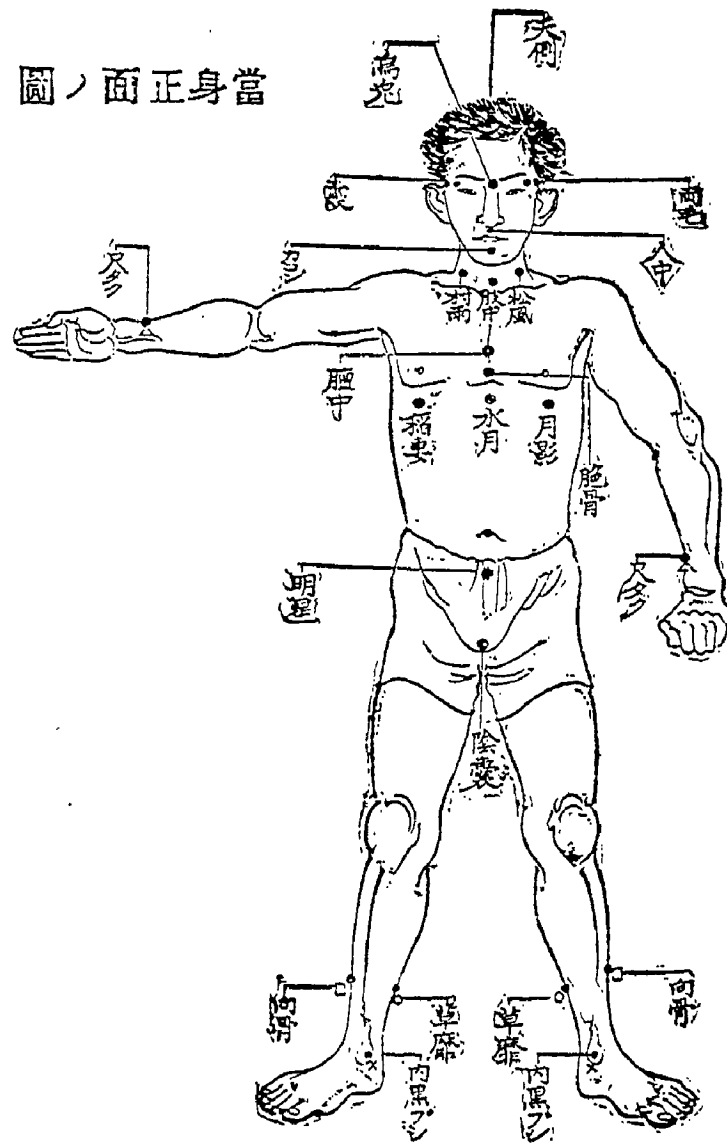


圖1 當身圖解 (柔術生理書)

古流柔術「殺法」に関する文献研究



図2 天神眞楊流・活法當身腹内圖解（柔術生理書）

神経ノ三神経ナリ此ノ三神経ハ元來眼神經ガ蝴蝶骨ノ孤間ヲ通シテ眼窩ニ入り以テ三抜トナル處ナル者ナレバ此法ニ依テ卒倒スルハ全ク是等ノ原因ヨリ來ルナリ

解説生理的ニ曰ク（眼神經，錯亂），（視感，激變），額骨，大腦，神經，額洞，内外骨突起，治療ニ曰ク殺法ノ衝點ニ就テ接骨說ニ基キ解説ヲ見レハ，鼻棘，三鼻道，眼神經，眼窩，鞏脈，脈絡膜，顔面神經，等

又柔術家ノ說ニ曰ク烏兎ノ當ハ兩眼中眞ナリ人軀ヲ天地人ニ配スレハ即チ天ニ象ドル故ニ天ニ日月アリテ陰陽ノ分ルハ人ニシテハ兩眼ノ上ニ有リテ事物明白ナリ故ニ是ヲ指シテ烏兎トハ云フナリ

亦兵陽書ニモ烏兎ト記セリ各流共此ハ皆ナ同一ナリト云フ

人中ノ殺

此ノ人中トハ顔ノ中央鼻ノ下部口ノ上部ノ間ヲ云フ

此ヲ握拳^{ケンコウ}ニテ當撃セハ場合ニ依テ活法ヲ施スモ其ノ甲斐ナシ故ニ注意スヘキ第一ノ所ナリ假令稽古中タリト雖ドモ漫リニ是ハ成スヘカラス當身ノ内ノ極大切ノ窮所ナリ故ニ此ハ顔ノ動脈外頸動脈ヨリ分岐シ下顎骨ノ縁ヲ横断シテ頬ヲ過ギ鼻側ヲ登リテ眼ノ内眦ニ達ス此ノ動脈尚ホ十枝ヲ生ズ其ノ上冠枝ハ恰モ鼻下中央ニ位ス圖ニ記ス是レ此ノ殺法ノ殺ナリ，但シ之ヲ殺當的トスルハ（三神經）ヲ説略ニ曰ク（視神經）ニ及ビ（顔面神經）等鼻下ニ横渉シアレバナリ（生理說ニ曰ク）

視神經擾亂，呼吸妨害，神經激衝，顔面動脈神經，鼻經，上顎骨，口蓋骨，三叉神經，劇衝，

右ニ依リ術法之ヲ人中ノ當ト云フ此ノ當ハ前ニモ述フル處ノ如ク大事ノ殺故ニ稽古ニモ試ミル^レ勿^レ

兩毛並ニ霞ノ當

（此ノ兩毛及ヒ霞（殺當）ハ流派ニ依テ違ヒアリト雖モ大畧十六流ニテハ二様ニ號ク）

是ハ顔ノ上部兩眼尻ト兩眉尻ノ間ヲ云（俗ニ米啗ト云處ノ廻リ一寸四方ヲ云），是ハ手刀ニテ打撃

シテ當ル者ナリ速ニ摔倒セシムルナリ又ハ下頷ヲ脱臼スルモノモアリ稽古中又形ヲ取ルニモ心ヲ附ベシ、顳顬骨、眼尻ノ處ヲ搏撃シ頭顱ノ左右兩方ニアリテ鱗狀、岩狀、乳頭、ノ三部ヨリ成ルカ故ニ、中腦膜、動脈、鼓索神經、鼓膜張筋、二膜筋窩等ニ連ナル附着點ハ乳頭部ニ存ス而シテ顔面神經、第八對神經、ジャコブソン神經、ロチモンール神經節等ハ、岩狀部ニ存通ス故ニ顳顬骨ヲ打タレテ摔倒スル理解ナリ（生理說ニ曰ク）脛髓反劇、諸神經攪亂、顳顬骨、ニ成立ツ、三部ニ起因スル者ナリ

附捕身ノ法

此ノ法ニ曰ク相撲ノ手ニ打手ト唱フル物ハ即チ是ナリ掌中ヲ以テ強ク打ツ時ハ必ス敵卒死スル者ナリ縱令ハ活生スルト雖トモ全ク耳ノ聴力ヲ失ヒタルカ爲メ回復ナシ難キニ及ブ故ニ鼓索神經ハ水道ト並行スル管内ヲ上行スル鼓室ニ入り而シテ神經節ヨリ起ル知覺纖維ハ鐙筋及ビ内耳筋ノ諸筋ニ走り且ツ鼓室前方ノ鼓膜ヲ以テ分界トス其内ニハ空氣ヲ充滿ス故ニ搏耳卒死ノ原因ハ（生理說ノ解ニ曰ク）

鼓膜劇然、鼓索神經、錯擾ニ基クモノトス而シ其内譯ハ、外耳、小耳、内耳、三耳筋ナリ左右アリ名稱ハ同シナリ

獨古ノ當

是ハ左右トモ兩耳ノ下少シク深ク窪ミタル後ノ方ヲ云フ

圖ノ如キ顳顬骨ノ乳頭突起ト下顎骨枝トノ間ヲ強ク打撃スル處ナリ此當ハ握拳ニテ突クカ又ハ親指ノ先キヘカヲ入シテ捺シ突ク時ハ柔術形中ニ敵ノカヲ抜ク處ナリ即チ耳袋ノ下裏ヲ崩破スル所ナリト云フ、後耳筋ノ起點ト唇腮結節ノ間ヲ強壓スル所以ナリ柔術家ニテ形受捕方ニテモ此處ニテ好ク押當ルナリ大略兩毛ニ解説ニ同シ様ナルヲ同シトスル

顔面神經ハ初メ延髓ヨリ起リ而シテ耳下線中ヲ道進シテ外頸動脈ヲ横渉シ下顎枝ノ後部ニテ兩宗板ニ分ニ叛ス此分岐點モ又一衝ニシテ摔倒スルノ原點ナリ猶（生理解說ニ曰ク）

大耳、顔面、舌咽、三叉神經、内頸動靜脈、等ノ血管ニ及ビ神經ヲ壓迫スルニヨルナリ此ハ左右トモニ同シ名稱ナリ

肢中ノ殺

（此ハ喉頭ト胸骨ノ上ノ氣管ヲ云フ）

柔術ニ曰ク厭倒ス是ヲ殺シ締落スノ氣管ヲ突當スルニハ圖ノ如ク起哨ナリーヲ亂捕ノ時ニハ突込締、腔締、襟締、等ニテ落命スル極意上段以下ノ教授ヲ受クル際ニモ屢々締落ル皆人ノ知ル處ナルカ元來此ノ法ハ喉頭ト胸骨ノ間ニ在テ氣管ヲ壓スルモノニ爲メニ息道ヲ絶シメタルニ起因ス但シ氣管ヲ閉塞スルニハ雙手ニテ襟ヲ絞リ上げ左手ヨリ「ヂリリ」ト絞リ乍ラ突キ試ミ壓迫スルハ柔術極意ノ尤モ秘傳ニ在ル處ナリ（圖參照）及ビ亂捕圖モ參照スベシ

裸体捕等ニハ皆極意教授圖解ノ如ク成シテ捕フル者トス（但シ受ケ方ハ略ス）尚ホ氣管ハ肺ニ入テ分岐シ支端ハ直ニ氣胞ト交通シアルヲ壓迫スルガ爲メニ卒死ス故ニ眼前活死ノ自在ヲ示ス事、此法ニ勝ルモノナシ故ニ此法ハ柔術ノ神法ニシテ秘傳中ノ秘ナリ（之ヲ生理說ニ曰ク）

呼吸氣室塞（咽喉）、氣管、肺臟、氣管支、等ナリ

但シ各流共亂捕ハ締ト號シテ咽喉ヲ締ルハ一般ノ事ナリト知ルベシ是ハ挿書ニテ三圖ニモ記スル處ノ柔術亂捕及ヒ組打ノ締メ方又ハ自縊シタル者咽喉ノ中眞ヲ云フ活法ハ誘活襟活ニテ人工呼吸術等ナ

古流柔術「殺法」に関する文献研究

レドモ其他ノ活法ヲ施スモ可リ

風月
村雨ノ殺
松風

此殺ハ流名ニ依テ異名アリ然レドモ急所ノ點ニ至テハ毫モ相違スル所ニ在ラズ今茲ニ記スル處ノ術法ハ咽喉ノ兩脇ノ處ヲ指シテ云フ

圖ノ如ク胸鎖乳頭筋ノ外側ニ位シテ肩胛舌骨筋ノ上ニ起リ而シテ顚顚骨ノ乳頭突起ニ附属スルモノナリ、併シ肩胛舌骨筋トハ肩胛上縁ヨリ起リ舌骨ニ抵止スルモノナリ、之ハ腦神經ノ第八對ナル肺胃神經ハ延髓ヨリ起リテ頸動脈ノ鞘内ヲ下リ首ノ右傍ヲ過ル時ハ鎖骨下動脈ヲ叉行シ以テ肺蒂ニ抵リ管ニ通スルモノナリ又首ノ左傍ヲ通ズルニハ肺蒂ノ後部ノ胃管ノ前方ニ下行ス而シテ猶横膈神經ナルモノアリ第三第四ノ頸椎神經ヨリ起リ鎖骨下動脈ト其靜脈トノ間ヲ經テ胸腔ニ進入ス、其左側ニ於テハ大動脈弓ノ前部ヲ横渉シ肺蒂胸膜及ビ心囊ニ遞ルナリ、右肺胃神經（一名迷走神經）横膈神經ハ其ニ頸ノ左右ヲ通スルモノナリ、而シテ頸動脈又然リ今衝的トスル處ノ胸鎖筋ノ外側及肩胛筋ノ上部（頸ノ前下部）ヲ壓迫スル時ハ右ニ神經并ニ肺（氣管）胃（食道）管ヲ絞壓スル故ニ卒死ス（生理說ニ曰ク）

兩神經（刺劇）（氣管）（壓塞）呼吸氣（絕息）胸鎖乳頭筋、肩胛筋、肺胃神經、横膈神經、頸動脈、氣管、等ニ原因ス

但シ頸ノ左右上方ヲ柔術法ニテ急處トナス（圖參照）

右ノ通りニテ右部ヲ村雨ト稱シ左部ヲ松風又ハ風月トモ云フ是レ古來ヨリ柔術家各流ノ最モ重スル秘訣ニシテ此殺法ヲ行フノ衝的ノ異稱ナリ之ヲ天神眞陽流ハ奧義秘傳トシテ今尚ホ重スル處ノ法ナリトス

前ニ云如ク解ニ曰ク松風ノ殺法ハ左喉ノ當リヲ云フ是レ天地ニ位シテ陽ナリ此ノ徑ハ氣ヲ往來スル所ノ道徑ナリ、凡ソ人間上焦ニ咽喉ノ二ツ左右ニ分レテ在ル處ノ二管有リーヲ水穀ノ道ト云ヒ一ヲ息管ト云フ此ノ二個ヲ以テ肺ト臟ノニヶ所ニ附續シアルナリ、又此ノ裏面二十律備リ人間ノ韻聲ハ此肺ヨリ出ルナリ、活ハ則チ大肺ヲ摩迫シテ諸經ニ通ズルヲ以テ蘇生ス村雨ノ殺法ハ右咽ノ當リヲ云フ之レ陰ニ位シテ下ハ胃ニ通シ水穀ノ道徑ナリ凡ソ飲食ヲ胃ニ納ムルハ胃腑ノ脾ノ下ニ位シ居ルナリ、水穀ノ納ムル處ヲ上脘ト云フ臍ノ上五寸ハ水穀消化ノ地ナリ、胃ノ正中脘ト云フ臍ノ上凡四寸ハ飲食腐熟スルニ膈ノ管ナリ、活ハ脾ノ地ヲ摩擦シテ回復ヲ補ヘ徐々ニ迫壓スベシ、總テ殺ハ此ニ意ヲ以テ知ルベシ

人工呼吸術誘活襟活等ニテ回復スルナリ是ニハ筆紙ニ盡シ難キ處ノ口傳アリ

膈中ノ殺（肥骨殺トモ云フ）

此ノ殺ハ胸部心臓ノ當リヲ以テ云フ、

此當殺ハ胸骨ノ眞ノ中央ヲ云此ヲ當殺スルトキハ心臓ハ大血管ニ依リテ左右兩肺ノ間ニ懸重スル其心臓袋ノ前部ハ胸部ニ依リテ接シ第三肋軟骨ノ上縁ヨリ第五六肋間部ニ達シ肺縁其兩側ヲ擁護ス而シテ其側部ハ胸膜ニ由リテ蔽ハレ其膜間ハ左右共ニ横膈神經及ビ血管ヲ有スルナリ故ニ心袋ノ後部ハ氣管支及ビ胃管ニ對ス、此ノ衝的ニ依リテ卒死スル理ハ（生理說ニ曰ク）

神經震盪，血行遞復，呼吸氣絕，心臟，肺臟，交感神經，橫膈神經等ニ原因スルモノナリ活法ハ呼吸術及 誘活襟活一傳流活，肺入惣活等ナリ（圖參照）

膈下ノ殺

此殺ハ兩乳ノ下邊一寸餘方巡リノ所ヲ當ルヲ云フ

元來是ハ肺臟ニ屬シ是ヲ當殺衝的ハ心肺ノ兩臟ナルモ肺ヲ以テ衝點トス而シテ左肺緣ハ右肺緣ヨリモ多ク心袋ノ側部ヲ擁護シ又左肺臟動脈ヲ上トシテ氣管支ヲ中部トシ肺靜脈最下ニアリ故ニ當拳ニハ左肺ヲ好便トス肺ハ主トメ（生理說ニ曰ク）肺胃神經，交換神經，視經校神經ヲ充タス，殊ニ氣管支及ビ血管ヲ占有スル者ナレバ此ノ衝的ヲ突カハ刺經阻氣ニ基キ卒死スルハ人ノ知ル處ナリトス生理上是ヲ膈中眼主ト云フ是ヲ活法ノ術ヲ施スニハ人工呼吸及，誘活，襟活，惣活肺入，亦一傳流活等ナリ

亦天神眞陽流ノ口傳ニ曰ク

膈下ノ殺法ハ兩乳ノ邊ヲ指シテ云フ此經ハ即チ心，肺，二臟ニ徹通スル處ナリ，心肺ノ二ハ上方ニ位シテ下焦ノ穢濁ノ氣ヲ受ケステ當ル所ノ經ハ兩方各一寸ナルカ故ニ第一心臟ニ當ル者ト知ルベシ，心臟ハ肺中ニ孕テ膈中ニ有スル上位ナリ，依テ之ヲ膈膜ト云フ者ヲ蓋フテ有ル故ニ心臟ノ二ツハ下焦水穀ノ穢氣ヲ受ケザルナリ，五臟ニ至リテハ誠ニ君主ノ住位ナリ，神明ノ寓スル處一軀ノ神靈ナリ，外臟腑ハ此心臟ヨリ達スルナリ此地少シク常ニテモ甚タ強ク感激スル時ハ是レ實ニ天真ノ氣ノ至ル處最モ柔術法ニ於テモ大事ノ殺法ナリトス

水月ノ殺

此殺ハ腹部ノ上胸部ノ下，即胸腹ノ間ダ体内ノ中央眞中ヲ云フ

胃腑，劍狀突起（胸下端，心窩）ノ眞下ヲ突撃スル處ナリト此ハ柔術形ニ於テハ尤必用成先ニ出版ナシタル處ノ柔術劍棒圖解及ビ柔術極意教授圖解等ニモ詳細ニ説述セシ者ナリ心窩ノ邊ハ胃ト肝膽ニシテ脾モ亦接シ胃ハ左ノ末肋部上腹部ニ位シテ左端ハ脾ニ接シ肝臟ハ右ノ末肋部ヨリ左末肋部ニ達シ其右葉ハ胃ヲ蔽フ脾ハ左リ肋骨ノ部分ニ在リテ第九第十第十一肋骨ニ達シ横隔膜ニ懸絡ス右ノ血管ハ脾肝膽ノ動脈アリ神經ハ迷走横膈肝叢等ニアル諸神經ヲ具フ故ニ比衝的ヲ一撃セバ諸臟ノ神經ヲ刺戟スルヨリ反腦，刺經，衝脈三因ニ依リテ卒死絶倒ス，故ニ（生理說ニ曰ク）

脾胃肝，横膈膜，神經，腦脈，ノ關係ニ依リ此活法ハ前ニ同シ又裏活ヲ用ス尚ホ天神眞陽ノ口傳ニ曰ク水月ハ尤モ極意ノ大切ナル殺法ナル者トス故ニ一切ノ臟腑，經絡ノ分ル、處是レナリ此水月ハ脾ト胃ノ中，下ノ陽ニ當ルニ因ッテ一切ノ殺法ハ此ノ理ニ依リ施行スベシ，神腑ト云フ腑，之ハ腎心ノ性ヲ受ケタル氣經ヲ形チトリタル生腑ナリ，常ニ此腑ハ陰陽ヲ受ケ萬風ヲ生ズル地ナリ，即チ氣絶シテ少シノ間ダ臟腑ニ止滯シテ内部ニ空ノ如クナルヲ以テ遂ニ生回ス可カラザルニ至ル最モ死生ヲ司ドル大事ノ處ナリト云柔術ノ形中段以上ニ及ブ時ハ受方ハ眞ニ當ヲ受ル故最モ大切ナルモノナリ以下大略同シトス

月影ノ殺

此ハ小浮肋下部左方當（俗＝肋腹^{アハラ}ト云）殺也肝臟ニ及ビ左ノ腑胃左脇腹邊ノ處ヲ云浮肋下部ノ左方ヲ指シ肝臟ハ軀中ノ最モ大腺ニメノ右末脇分ヲ過ノ

古流柔術「殺法」に関する文献研究

左末脇部ニ達ス左葉下面ニハ膽房溝，大静脈溝ヲ存シ結膈右腎ハ該部ニ接ス，右葉シ面ハ胃ヲ覆ヒ，後方ハ胃ノ噴門ニ近聯ス（生理説ニ曰ク）（神経ハ肺胃神経）膜膈神経，及ヒ交感神経ノ肝臓叢等ヲ有ス故ニ（亦曰ク）肝臓ニ通接スル神経及ヒ胃膽ヲ刺戟シ呼吸氣ヲ激擾スルヨリ卒死スルナリ（即チ肝，胃，腎ノ三神経）而シテ此ノ月影ノ殺法ハ直チニ肝ヲ突キ富ルナリ，肝ノ形ハ木葉ノ如クニシテ七葉有リ，四葉右ニ有リテ陰ノ部ナリ三葉ハ左ニアリテ此ヲ陽ノ部トス（之レ女子ハ男子ト左右ノ相違アルヲ知ルベシ）陰ハ偶，陽ハ奇ナレハ之ニヨリ理得スヘシ，（此ノ殺法モ又大切ニシテ必ス心得置ク可キ處ナリ），膽肝ノ臟腑ハ都ヘテ人間剛強ノ氣力ガ出ル處ナレハ先ツ之ヲ窘迫スヘシ，月影ハ門ノ邊ニ近シ強ク經ルニ當ル時ハ力ヲ持事難シ，故ニ思ノ外ニ吐息ヲ出ス依テ之ヲ心得置クヘキ事トス（活法ハ前ニ同シ又肺入活氣海總活法ヲ用フ）

異名 $\left(\begin{array}{l} \text{電光ノ殺} \\ \text{稲妻ノ殺} \end{array} \right)$

此ハ浮肋下部右ヲ云（俗ニ肋腹ノ當ナリ）殺ハ肝ノ臟，即チ浮肋下部右方ヲ搏撃スルヲ云フ，月影ノ部ニ於テ示セシガ如ク肝臓ハ右方ノ浮肋（通常浮骨ト云フ）下ヨリ左方ノ浮肋迄達スルモノナリ，故ニ肝ノ衝的ハ左右ニ在リテ左ヲ電光ト云フ右ヲ稲妻ト云フ，肝線ハ諸接スル故，之ヲ衝突セハ稲妻ト云フ，其関連スル處ノ最モ多ク忽チ有力ノ功ヲ奏ス，我國十八流ノ柔術家ニ於テモ主トシテ此ノ手ヲ修メシム然レドモ此法ハ最モ危激ニシテ萬一ヲ誤レバ又タ回復スル事無シ難キニ至ルヲ以テ多ク戰場等最モ大事ノ場合ニノミ施シ普通ニ用ユル事ナシ，（生理上ニ曰ク）左右ノ斷要ハ前條ニ同ジク亦曰ク天神眞楊流ノ口傳ニモ曰ク電光殺法ハ膽ノ腑ニ當リ日月ノ位ニ近シ膽ハ肝ノ四葉ノ間ニ臟ヨリ各別々ナル者ナルカ故ニ胃ハ水穀ヲ入レ小腸ニ受ケ，膀ハ液ヲ受ケ大腸ハ糟粕ヲ受ケ五臟ニ，何レモ受ケ納ムルニ膽計リ離レテ水穀穢濁ヲ受ケス，葉ノ間ニ屬シテ精清ノ天氣ヲ守ル者ナリ，人間形骸ノ氣，剛柔，都テ之ヨリ出デザル事ナシ人力ハ膽ノ致ス處ナリトス，此ノ殺シハ頗ル速カナルカ故ニ稲妻ト云フ人間剛柔ノ氣ヲ司トル線經ナルト云フ此稲妻ト電光トハ流名ノ相違スル處ヨリ異名ス（活法モ月影ニ同シ）

明星ノ殺

此ノ殺ハ臍ノ下一寸四方ヲ云フ此ノ處ノ衝的ハ腸ト膀胱ヲ點票トスルハ何レノ柔術家ニテモ同様ナリ之レニ就テハ腸ニ大小アリテ大腸ハ衝點ノ眞票ニアラザル事ナレバ諸家ノ知ル處ナリ，衝的ニアラスト言ハサルモ小腸經三分ノ二ヲ右トス尤モ三離ヨリ成ル第一部ノ十二支腸ハ胃ノ幽門ニ始リ空膽ニ達シ此腸ニ接スル者ハ肝臓膽囊腸，結締横膈膜，大動脈，静脈等ナリ殊ニ此ノ腸ノ裏ハ膽汁ニ着色セラル、所ナリ，第二部ノ空腸頗ル血管ニ富ム故ニ其色深濃ナリ第三部ノ回腸ハ腹部ノ右側ノ腸骨窩中ニ存スル腸盲辨ニ終ル者トナスナリ（腸脈ハ上腸間膜動脈ヨリ來リ神經ハ太陽叢ヨリ來ルモノナリ）膀胱ハ筋腸ノ一囊ニシテ取骨縫合ノ後方則チ直腸ノ前方ニ在リ而シテ膀胱ハ四膜ヨリ成ル（生理説ニ曰ク）腹膜，筋膜，粘締，織膜（粘膜）之レナリ，就中結締膜ハ頗ル緻密ニシテ筋粘，兩膜ト維持シ，血管神經ノ通路ト成ル，今ヤ衝的即チ大小腸及ビ膀胱ノ二腑ヲ劇格シテ卒死スルモノナリ，生理上ノ論スル處モ全ク血行神經ヲ遽格スルヨリ呼吸絶息スルナリ（各柔術家ニ於テ）活法ハ必同ジ事活法ヲ用フ（大小腸，膀胱）ノ二腑ヲ劇震スルニ起因スルナリ

後電光ノ當

此當ハ背部（俗ニ三ツ當リト云フ）（第一）背ノ第三脊髓ヲ衝突スルヲ云フ（二）背ノ第五椎ヲ衝突スルヲ云フ（三）背ノ第六椎ヲ衝突スル處ヲ云フ而シテ卒倒ノ起因スル處ハ第一肺臟ノ刺劇ニ由ル，第二ハ心腸ノ刺劇ニ由リ，第三ハ脊髓中樞ノ激動ニ原因ス，中樞ヲ衝突セバ脊髓全軀ヲ激動スルナリ，又延髓ヲ刺衝スルノ理ハ依之明白ナリ，故ニ此後電光ノ三ツ當リニ就テハ柔術家其人ハ其方法ニ及ビ原因ニ異説多シトス，故ニ目今ハ此ノ説ヲ解クノハ脊椎ノ側傍ヲ通シ或ハ此ノ二者ニ關係セシ骨筋脈絡ニ及ンテ神經ヲ激震スルニ依ル者トス，（生理説ニ曰ク）之ヲ解明シテ腦髓ノ關係，脊椎，心肺，肋骨及ビ筋ニ關係スル依テ脈及ビ神經ノ壓蕩ニ依ル事ナリ是ノ活法ハ惣活ニ及肺入活法氣海惣活裏活等ナリ都テ人工呼吸術ヲ活法ノ第一トス（圖參照）

5. 終りに

現在の講道館柔道の技術体系は、投げ技、固め技（抑込技、関節技、絞め技）、当身技によって構成されており、そのうち投げ技、固め技は乱取技（自由に攻め合う技）として発展し、今日の競技柔道の隆盛をみている。一方、当身技のみは、練習上の危険を考慮し、またその乱用を防ぐために、自由練習の形式をとらずに、一定の順序法則に従って約束練習をする形的修練に止まっている。即ち、当身技は「形」としてのみ残されている。当身技は、競技としては取り扱いにくい、護身法、体育法としては価値ある技術内容が含まれており、その研究、練磨にもっと力を注ぐべきであると考えられる。古流柔術の技術体系を概観すれば、それは護身法としての意味あいの濃いものであり、現代における総合護身道といったものの確立には、古流柔術技法から学ぶ点は極めて多いと思われる。

講道館柔道においては、当身技は「形」としてのみ修練されるためか、当身技に関する技術的研究、さらには攻められる側の急所に関する研究（その部位の詳細、生体への生理的影響等）はこれまで等閑視されてきた。わずかに、山田、浅見の研究報告を見るにすぎない。山田は、古流柔術において当身術が重視されてきたこと、当身の急所に関して約80ヶ所を数えとし、その名称が列記されているが、詳細は不明である。浅見は、即死の急所（9ヶ所）、即倒の急所（6ヶ所）を選び、握拳での打突に対する生体の反応を観察し、呼吸循環反応、神経感覚反応の激しさを報告している。

講道館柔道においては、創立（1882）後数年を経て、真剣勝負の形として「極の形」が制定され、その中で当身で攻める部位として、水月、烏兎、釣鐘、膝関節、下顎等の急所が挙げられている。昭和6（1931）年、創設者嘉納師範自らが著した「柔道教本」（旧制中学1,2年生対象）には、形学習の際の急所として、天倒、烏兎、霞、独古、人中、勝掛、水月、月影、電光、明星、釣鐘、膝関節の12の急所が選ばれ、示されている。また、昭和31（1956）年制定の実戦の形としての「講道館護身術」で取上げられている急所は、霞、両眼、下顎、膝関節、水月、甲利、月影、釣鐘、電光、烏兎、人中である。これらのことから、講道館柔道における当身の急所は、天神眞楊流柔術をほぼそのまま受け継ぎ、そしてそこに止まっている状況であることがわかる。

楊心流、眞之神道流、天神眞楊流三流の殺法における急所の名称及び部位は、ほぼ同様ながら、そ

古流柔術「殺法」に関する文献研究

の数は後から起こった天神眞楊流が一番多い。当初は、生体に与えるダメージの大きい、いわゆる即死の急所が取り扱われており、ほとんどが内臓器あるいは脳髓と関連を持ち、単なる神経系への衝撃だけでなく、内臓破裂、大脳破壊を伴うような部位が中心である。ヒトの生命活動を阻害する部位と直結しており、大体人体の正中線に沿って存在し、背面は脊髄線上を中心としている。後半になると、即死の急所にさらに即倒の急所が増えている。即倒の急所は、手足に多いところからみて、末梢の神経系（知覚、運動）に対する直接的刺激を加えやすい急所と見ることができる。

また、古流柔術の技術変遷の中では、中世の鎧を着用した戦場「組み打ち」による捻じ伏せ、とり抑えることを主目的とした技から、江戸時代の平服柔術への移行、大陸からの拳法の輸入などによって、柔術の技術構成は、当身技中心の護身術として発展してきている。殺法の技術展開の中では、当身技のみが用いられることは少なく、投げ技、関節技、絞め技との連絡の中で用いられる技が多い。これらの歴史的経過の中で、活法も殺法と共に表裏一体となって発展してきており、絞め技で相手を落し（意識消失）、制する技と落ちた相手を蘇生させる活法の工夫、研究、また当身技、関節技の外し技で制した際の、相手の傷害に対する処置、整復法などの医療技術の工夫、研究も同時になされていた経過がある。明治16（1883）年「医術開業試験規則」（西洋医学）の制定以降、古流柔術伝統のこれらの医療技法は衰退、失伝の一途をたどった。大正9（1920）年、「柔道整復術」が公認されたが、今日では、古流柔術技法を伝える人達と伝統の医療技術は夫々別の道を歩んでいる。これらの経過も詳らかにしておく必要性を感じている。

最後に、楊心流、眞之神道流、天神眞楊流、講道館柔道と引き継がれてきた技術体系の中で、当身技によって攻める急所に関して、その名称、部位を纏めると、1、頭顔頸部——天倒（てんとう、頭頂部）、烏兎（うと、両眼の間）、人中（じんちゅう、鼻と口の間）、両毛及び霞（りょうもう、かすみ、眼尻と眉の間、こめかみ）、独占（どくこ、耳下）、肢中（しちゅう、喉頭部の気管）、松風及び村雨（まつかぜ、むらさめ、咽頭の両脇）、2、体幹部前面——臆中（だんちゅう、胸骨中央部）、鴈下（がんか、両乳の下部）、水月（すいげつ、胸腹の間、みぞおち）、月影（つきかげ、左脇腹）、稲妻（いなづま、右脇腹）、明星（みょうじょう、臍下）、陰囊（いんのう、睾丸）、3、体幹後面——後電光（うしろでんこう、胸髓下部）、活（かつ、胸髓上部）、4、上肢——尺タク（しゃくたく、手首上部）、5、下肢——草靡（くさづり、腓腹筋中央部）、向骨（むこうぼね、経骨下部）等である。

今後は、殺法に関しては、より古い流派の竹内流、関口流、制剛流等の調査、また急所に関しては、空手、ボクシング等の他の格技スポーツの急所及び東洋医学・鍼灸術における経穴・経絡（ツボ）との比較検討が必要であると思われる。

参考文献

1. 浅見高明：柔道当身技の研究 1，講道館柔道科学研究会紀要Ⅳ，53-78，1972.
2. 井ノ口松之助：死活自在接骨療法柔術生理書，魁眞書樓，32-59，1896.
3. 老松信一：日本武道大系，同朋社，396-398，399-401，402-404，1982.
4. 老松信一：楊心流，眞之神道流，天神眞楊流柔術について，柔道（4月号），38-44，（5月号），48-52，1967.

5. 嘉納治五郎：柔道教本，堀書店，41-45, 1931.
6. 久保田敏弘：「天神真楊流柔術」について，柔道（10月号），56-63, 1996.
7. 櫻庭 武：柔道史攷，日黒書店，97-103, 104-106, 141-165, 1935.
8. S. P. サーバッシュー：活殺法の秘奥，ベースボール・マガジン，14-15, 1996.
9. 手塚政孝：柔術「活法」について，明大経営学部人文科学論集45, 1-13, 1997.
10. 富木謙治：武道論，大修館，134-140, 1991.
11. 日本古武道協会：日本古武道総覧，島津書店，40-41, 1998.
12. 平上信行：秘伝古流柔術技法，愛隆堂，266-269, 1995.
13. 山田 康：当身の急所について，柔道（10月号），4-6, 1948.
14. 山田 康：当身技概説，柔道講座3，白水社，156-164, 1956.
15. 吉田千春，磯又右衛門：天神真楊流柔術極意教授図解，大川屋書店，17-21, 1917.

（てづか・まさたか 経営学部教授）